

集会宣言文

九州のマッターホルンと呼ばれる虚空蔵山。そこを源として川原の里を流れる石木川。その流れは川棚川に合流し大村湾に注ぎます。中流域の川原地区は水田が広がり、初夏にはホタルが飛び交うところです。そのような川原地区での自然と結びついた人々の営みは時の流れの中で幾代にも亘って続けられてきました。

その川原地区を沈める石木ダム構想が持ち上がったのが1962年。佐世保市への水の供給のため、川棚川での洪水防止のため石木ダムが必要だと長崎県や佐世保市は言います。以来、長崎県はダム事業を推進しようとしています。川原地区住民や全国の支援者によって阻止されてきました。

石木ダム問題は、もはや長崎県だけの問題ではありません。石木ダム事業は補助ダムであり、国からの補助金が支出されること、またダムができれば地域コミュニティと自然環境を破壊するということ、事業の必要性や合意形成プロセス、説明責任に問題があること、適正な公共事業のあり方や人権問題として大いに疑問があること、ダムで沈むとされる川原地区の豊かな自然や暮らしの価値は、この地域だけでなく、普遍的な人類の財産であることなどに鑑みれば、日本に住む人間一人一人にとって大きな問題です。

石木ダムの建設目的はすでに失われています。佐世保市の水の需要は近年減るばかりです。また、川棚川も河川改修が完了すれば想定する最大の降雨が発生してもダム無しで溢れずに流せます。

このような無駄なダム建設に長崎県は総事業費538億円（関連事業費含む）もの税金を投入し、自然を破壊し、水没予定地住民の生活を奪い、私たちに負の遺産を押し付けようとしています。

長崎県は、一方では、住民と対話しようとするそぶりを見せながらも、他方、県道の付け替え工事や地質調査など、住民や支援者の抗議にもかかわらず、強行しています。このような姿勢を住民が信用できるはずがありません。話し合いによる解決を求めているのは住民です。しかし、住み慣れた土地が工事で壊され続けている状態では、心落ち着かせて話し合いに臨むことなど出来る訳がありません。長崎県が本当に住民と対話する気があるのなら、全ての工事や調査はいったん中止すべきです。

私たちは、石木ダムの不用性を多くの人に訴え、つながっていきながら、川原住民への人権侵害をやめさせ、石木ダム事業を中止させることにより、石木川を守ることを宣言します。

2021年6月27日 「石木ダム問題・日本全国言いたか放題！2

現場もネットも100人座れば工事も止まる」参加者一同